

Title	「本性」と「経験」：メヌ・ド・ビランにおける心身合一の基底
Sub Title	Nature et experience : fondement de l'union de l'ame et du corps chez Maine de Biran
Author	芝原, 隆 (Shibahara, Takashi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1985
Jtitle	哲學 No.80 (1985. 5) ,p.57- 84
JaLC DOI	
Abstract	Le biranisme est une reflexion sur l'existence et la philosophie de l'experience. Des lors, Biran affirme, de facon originale, l'existence du corps uni a l'ame donnee dans l'experience personnelle. Mais, en quoi consiste le fondement de l'union de l'ame et du corps ? Biran, lorsqu'il aborde ce probleme, cite Malebranche et Condillac en se proposant deux concepts antithetiques qui caracterisent respectivement la theorie malebranchiste ou condillacienne du corps propre: <<nature>> et <<experience>>. Avec ces deux concepts le present article se preoccupe de mettre en lumiere l'originalite de la theorie biranienne du corps propre dans l'histoire de la philosophie moderne. Condillac, Cabanis et Destutt de Tracy, confrontes a la theorie malebranchiste du jugement naturel, issue du cartesianisme, ont successivement entrepris de fonder l'union de l'ame et du corps sur les donnees de l'experience, et tous les trois ont fini par invoquer la nature malebranchiste. Seul Biran a reussi a maintenir l'exigence empiriste jusqu'au bout, en privilegiant l'experience interieure et cela sous l'influence de Locke.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000080-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「本性」と「経験」

——メーヌ・ド・ビランにおける
心身合一の基底——

芝 原 隆*

Nature et Expérience

——Fondement de l'union de l'âme et du corps
chez Maine de Biran——

Takashi Shibahara

Le biranisme est une réflexion sur l'existence et la philosophie de l'expérience. Dès lors, Biran affirme, de façon originale, l'existence du corps uni à l'âme donnée dans l'expérience personnelle.

Mais, en quoi consiste le fondement de l'union de l'âme et du corps? Biran, lorsqu'il aborde ce problème, cite Malebranche et Condillac en se proposant deux concepts antithétiques qui caractérisent respectivement la théorie malebranchiste ou condillacienne du corps propre: «nature» et «expérience».

Avec ces deux concepts le présent article se préoccupe de mettre en lumière l'originalité de la théorie biranienne du corps propre dans l'histoire de la philosophie moderne.

Condillac, Cabanis et Destutt de Tracy, confrontés à la théorie malebranchiste du jugement naturel, issue du cartésienisme, ont successivement entrepris de fonder l'union de l'âme et du corps sur les données de l'expérience, et tous les trois ont fini par invoquer la *nature* malebranchiste. Seul Biran a réussi à maintenir l'exigence empiriste jusqu'au bout, en privilégiant l'expérience intérieure et cela sous l'influence de Locke.

* 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程哲学専攻 (倫理学分野)

「本性」と「経験」

メーヌ・ド・ビラン (Maine de Biran, 1766-1824) の哲学において、心身合一の問題は最も核心的な主題の一つであり、従って彼の殆んど全著作に渡って検討の対象となっている。実際「原初事実 le fait primitif」「意志的運動 mouvement volontaire」「運動努力 effort moteur」「直接的覚知 aperception immédiate」「内官 sens intime」といったビランが好んで用いる術語は全て心身合一の事態をより整合的に説明するために用いられていると言ってよい。しかし、我々は、ここで問題を心身合一という事態が如何にして自我の内で把持されるか、すなわち自己の身体 (corps propre) は如何にして認識されるのかという問いに限定したい。⁽¹⁾

ビランに依れば、自己の身体は内官 (sens interne), 言い換えれば努力感覚 (sens de l'effort) によって把持される。内官によって把えられる凡ゆるものは意識の事実 (fait de conscience) であり、それらは内的覚知 (aperception interne)⁽²⁾ の対象だとされる。努力感覚によって把捉される自己の身体とは、努力の主体である自我の相関項、努力が適用される対項に他ならない。この対項をビランはライブニッツの用語を借りて「抵抗的持続」(continuatio resistentis, continuité de résistance) と呼ぶ。抵抗的持続としての自己の身体は内的延長 (étendue intérieure) の形式であり、外的空間 (espace extérieur) としての物質的延長 (étendue matérielle) とは本質的に異なる。後者が視覚、触覚等の客観的直観 (intuition objective) の対象であるのに対して、前者は直接的覚知 (aperception immédiate) によって把えられるからである。

では抵抗的持続として規定された身体は心と如何なる関係にあるのか。ビランは心と身体の関係を感じ覚の局在化 (localisation des sensations) の問題——すなわち心は受け取ったある感覚の原因を如何にして身体の特定部分に帰するのかという問題——として検討する。ビランに依れば、直接的覚知の対象である内的延長としての身体には次の二つの段階が区別されねばならない。⁽³⁾ ——(1)身体全体が一つの塊を成し、身体の各部分が互いに

区別されていない段階。(2)身体の各部分が互いに区別され分節された段階。
 ——諸感覚が身体の諸部分に局在化されるためには、当然内的延長としての
 身体は(1)から(2)の段階へと移行しなければならない。ではその移行は如
 何にして遂行されるか。運動力 (force motrice) あるいは運動主観 (sujet
 moteur) が繰り返し身体に働きかけることによってとビランは答える。継
 起的運動によって身体は多くの部分に分節され、分節化が進むほど運動主
 観もより判明になりより個別化される (s'individualiser) のである。では
 (2)の段階に移行し分節化された身体の各部分に特定の感覚を局在化させる
 のは何か。ビランに依れば諸感覚は努力、言い換えれば運動意志 (volonté
 motrice) と連合することによって初めて身体各部分に局在化される。要
 するに心と身体を結びつけているのはこの努力なのである。従って初めに
 述べた努力感覚によって把持されるのは単なる自己の身体ではなく、今や
 自己の身体の共存 (coexistence du corps propre)⁽⁴⁾なのである。すなわち
 力と抵抗という互いに区別されて (distincte) はいるけれども切り離され
 て (séparée) はいない一つの努力の二つの要素 (deux éléments du même
 effort) の共存である。ここにおいて身体は努力の主体としての自我の相関
 項なるに留まらず、自我の存在 (existence) そのものを規定するものになる。
 「自己の存在を認識し、感覚するとは、自己の身体を感覚することではな
 いだらうか。[...] 心にとって、自己の身体を感覚するとは存在すること
 であり、存在するとは自己の身体を感覚することである。」⁽⁵⁾

以上が心身合一のメカニズムであるが、このメカニズムの説明原理とし
 て、ビランは次の三つの可能性を挙げている。

- (1) 心の生得観念 (idées innées à l'âme)
- (2) 外的感官 (sens extérieur)
- (3) 内的経験 (expérience interne)

(1)はマルブランシュの方法で、心は生得的に身体との合一の観念を有して
 いる、すなわち心と身体は本性的に合一していると説く説明の仕方で、ビ

「本性」と「経験」

ランはこれを分析を放棄した説明として非難している。それに対して(2)はコンディヤックの方法で経験から出発して心身合一のメカニズムを分析的に説明しようとするものであるが、ビランはコンディヤックが経験を二次的認識にすぎない外的経験に限定したことを批判する。そして(3)の内的経験⁽⁶⁾こそがビランの採用した説明原理なのである。ビランはここで、心身合一という事態を説明する際の方法として二つの原理を対置していると考えられる。一つは心身合一を広く本能的・本性的〔自然的〕な事態として説明していこうとする態度である。しかし、こうした本性的なものの仮定による説明はビランに依れば分析に窮した挙句に持ち出される説明ならざる説明にすぎない。これに対して経験によって全てを明晰に説明しようとするところこそビランの意図であった。ロック思想の移入に端を発し、ルソーの「感覚的道德」(morale sensitive)、コンディヤックの感覚論、シャルル・ボネの「経験的心理学」(psychologie expérimentale)、そしてデストゥット・ド・トラシー、カバニスの「観念学」(idéologie)へと受け継がれていく、——すなわち十八世紀フランスを通底する——心に対する実証的態度の洗礼を受けたビランにとって、広い意味での経験主義こそ、彼の出発点だったのである。しかし、心身合一の問題に取り組むとき、彼の経験主義は一つの変質を強いられる。すなわち外的経験から内的経験への変質である。心身合一に対する^{ナチュール}本性〔自然〕による説明と経験による説明が交錯する哲学史を振り返り、ビランの「内的経験」の形成過程をたどることによって、その独自性を明らかにするのが小論の課題である。

I デカルトにおける自然と経験

ビラン自身はその日記の中で「デカルトの見解は^{アルティクル・ド・フォワ}信仰箇条ではない。」⁽⁷⁾と表明しているとは言え、デカルト哲学は殆んど常にビランの思索の出発点であった。しかし心身合一を問題とするとき、直接ビランの念頭にあったのは、デカルトではなく、マルブランシュとコンディヤックの理

論である。にも拘らず我々がここでデカルトから検討を始めるのは、ビロンが本性によって心身合一を説明とする態度を「デカルト学派に個有の視点」⁽⁸⁾と形容しているからであり、さらに何よりも既にデカルトにおいて心身合一の「本性 [自然]」による説明と「経験」による説明の対立が認められるからである。

1. 自然的傾向による心身合一

「第六省察においては、[...] 精神が身体から実在的に区別されることが証明される。にもかかわらず、精神は身体と緊密に結合していて、それと一体をなしていることが示される。」⁽⁹⁾——心身の分離と心身の結合、一見相矛盾するこの二つのテーゼがデカルト哲学の中で独自の仕方で並存している。第二省察において心身分離が理論的に証示されると同時に、第六省察においては心身合一が言わば事実的に容認されるのである。だとすれば心身の合一は我々の内で如何にして認識されるのか。

デカルトに依れば「我々の内にはいくつかの原初的概念 (notion primitive) があり」、「身体のみについては我々は延長の概念しか持たず」、「心のみについては思惟の概念しか持たない」が、「心と身体全体については、それらの合一の概念のみを持つ。」⁽¹⁰⁾つまり、我々は「原初的概念」を介して心身の合一を認識するのである。しかし原初的概念による認識とは一体何か。デカルトは、心、身体、心身合一についての三つの原初的概念の間には大きな違いがあるという。心は「純粋な知性」(entendement pur) によって、身体は「想像力に助けられた知性」(entendement aidé de l'imagination) によって認識されるが、心身合一は「知性のみによっては曖昧にしか認識されないが、感覚 (sens) によっては極めて明晰に認識される。」⁽¹¹⁾というのである。そして、心身合一を知るためには知性を行使する哲学的「省察を差し控えて」、「生活と日常的会話」⁽¹²⁾に身を委ねなければならない。要するに心身合一の原初的概念とは、形而上学的思索とは区別された「感

「本性」と「経験」

覚」の領域で行われる明晰な認識である。人間が生き、会話を交わす日常的な「感覚」の領域、そうした場では心身合一の事態は全く明らかなこととして知られる。それは人間にとって「自然な」認識である。心は「心に自然的な〔本性的な〕認識によって」心⁽¹³⁾が身体に合一していると判断するのである。心に自然的な認識とは何か。M. ゲルーの言葉を借りれば、それは「自然的傾向」すなわち「感覚された性質に、私の身体にとっての生物学的価値という客観的意義を結びつける本能 (instinct)⁽¹⁴⁾」である。実際デカルトにとって心身合一は何よりも苦痛・飢えといった生物学的諸感覚を通して、本性的に〔自然によって〕知られるものであった。「ところでこういう自然が何よりも私に明らかに教えることは (Nihil autem est quod me ista natura magis expresse doceat), 私が身体をもっている」ことであり、「また自然はそうした苦痛・飢え・渇き等の感覚によって、私が自分の身体にあたかも水夫が舟に乗っているように居あわせているだけではなくて、身体と極めて密接に結合されていて、言わば混合しており、かくて身体とある一体を成していることをも教えるのである。⁽¹⁵⁾」

我々は今や心身合一の原初的概念の内容を規定しなければならない。

「原初的概念」という言葉は我々にビランの「原初事実」という語を連想させるが、その含意するところは正反対と言わねばならない。ビランの原初事実が心身合一の事実の内的経験における直接的覚知であるのに対して、デカルトの「原初的概念」による心身合一の認識とは、「感覚」の領域における非常に明晰な「自然の教え」を意味するからである。

デカルトにおいて、この「自然の教え」の不可謬性はさらに神の誠実によって保証されるという構造をとる。そしてこの構造は、マルブランシュの「自然的判断」、さらに十八世紀における「自然」概念を準備するのである。

2. 経験による心身合一の認識

我々は、上で原初的な概念による心身合一の認識を、本性による認識と解釈した。しかしながら、この認識はまた一方で経験による認識でもある。

「我々は我々の精神が身体に合一していることを〔毎日〕経験する (experiamur)⁽¹⁶⁾」。「非常に確実で明証的な経験 (certissima & eidentissima experientia) が〔心身合一を〕毎日私に示すのである。⁽¹⁷⁾」ここで「経験」とは何を意味しているのだろうか。「毎日」起こるものである限り、それは生活における日常的経験であるとも考えられる。しかし «certissima & eidentissima experientia» という表現は我々に抗し難くピランにおける次のような直証的経験を思い起こさせる。——「思惟する故に能動的で自由である思惟主観としての人間は、自らの内にひとつの力があることを、またむしろ自分自身がひとつの力であることを非常に確実に——非常に確実な知識と明晰な意識によって (certissima scientia et clamante conscientia) ⁽¹⁸⁾——知るのである。」

実際、「我々は単に精神だけでも、また単に物体だけでも帰されてはならないある種のもを我々の内に経験する (in nobis experimur) が、これは […] 我々の精神と身体との密接な合一に由来するものである。⁽¹⁹⁾」「精神は〔心身合一を〕意識している (mens est conscia)⁽²⁰⁾。」というデカルトの言葉に耳を傾ける限り、心身合一が内的経験において明証的に捉えられ、デカルトにおける経験が内観の直証性を担っていることは否定し難いと思われ⁽²¹⁾る。

デカルトにおいては、心身合一の事態について「自然〔本性〕」による説明と「経験」による説明とが、截然とは区別されないままに同居し、後者はピランの「内的経験」を予告していると言えよう。

II マルブランシュにおける自然的判断の変貌

マルブランシュの「自然的判断」(jugement naturel) の理論は、ピラン

によって、心身合一の「本性〔自然〕」による説明の代表的なものと考えられている。しかしマルブランシュの哲学の内にもピランの「内的経験」に類するものが実は見出されるのである。「内的感覚」(sentiment intérieur)がそれである。

1. 内的感覚

マルブランシュは心身合一に関する自らの機会原因論という仮説を基礎づけるのに、まず「内的感覚」を分析することによって始める。なぜなら「我々の認識の中で第一番目のものは、我々の心の存在」であり、「心は人がそれについてもつ内的感覚によってのみ認識される⁽²²⁾」からである。すなわちマルブランシュは正に内観の所与から出発するのであり、内観とはここで、心が心について持つ感覚なのである。そしてこの内観は不可謬なものでさえある。「あなたの意識、つまりあなたが自らの内で起こっていることについてもつ内的感覚は、決してあなたを欺くことはありません。」⁽²³⁾——人はここにピラン的な内的経験の直証性を読みとるであろう。実際ピラン自身、マルブランシュに対する讃嘆の念を明らかにしている。「[…]マルブランシュは同じ箇所サンチマンの注で次のように言う。『精神はその感覚を意識によってのみ認識する。また心はその思惟についてのみ意識をもつ。従って人が自分の腕サンチマンの運動についてもつ感覚——マルブランシュは、もしその言葉を知っていたなら、筋肉感覚(sensation musculaire)と言っただろう。——は、内的感覚乃至意識によって認識される。』[…]これ以上見事な説明、これ以上完全な分析はありえない。」⁽²⁴⁾意識の所与の有する特別な性格についてピランは確かにマルブランシュに共感しているのである。⁽²⁵⁾

しかしながら、他方ピランはマルブランシュを批判する。「彼〔マルブランシュ〕は心に現われる対象や存在についての認識のみを認識と呼んでいる。[…]しかし、内的経験に従うならば、我々が自分自身について、つまり、意志し行為する自我についてもつサンチマン感覚に等しい認識が存在するこ

ともやはり真実である。」⁽²⁶⁾

ここでマルブランシュにおける「自らを感覚すること」(se sentir) と「自らを認識すること」(se connaître) の違いについて触れておく必要がある。⁽²⁷⁾ マルブランシュに依れば、我々は「感覚」(sentiment) を介して自分自身を感覚し、認識の原型 (archétype) としての「観念」(idée) によって自分自身を認識する。心が自分自身についてもつ「感覚」が曖昧なものであるのに対して、観念による「認識」は明晰である。マルブランシュはこの曖昧な「感覚」と明晰な「認識」を厳しく区別する。心は「感覚」によって自らの内で自らを認識するが、我々は我々が神の内で見える観念を介して「叡知的延長」(étendue intelligible) を我々の外に表象することによって「認識」を遂行するのである。マルブランシュにおいて、「認識」の対象が我々の外にある「叡知的延長」である限り、「認識」は外的にならざるを得ない。ビランはそのことを批判しているのである。

我々はまた心が自身についてもつ「内的感覚」が曖昧なものであることに注意しよう。ビランの内的経験が不可謬かつ明晰であるのに対して、マルブランシュの「内的感覚」は、「我々の非力を我々に理解させるために、また我々の力についての曖昧で混雑した感覚 (sentiment obscur et confus) を我々に与えるために、我々に与えられている。」⁽²⁸⁾ ののである。

今や我々は、マルブランシュの「内的感覚」は次の二点で、ビランの「内的経験」とは根本的に異質であることを確認しなければならない。第一にマルブランシュの「内的感覚」の対象が心であるのに対して、ビランの「内的経験」の対象は心身合一であること。第二に、マルブランシュの「内的感覚」が曖昧な「感覚」であるのに対して、ビランの「内的経験」は确实で明晰な「直接的覚知」であることである。ビランは、マルブランシュの「内的感覚」の「結論を努力感覚の特殊性へと向け直す」⁽²⁹⁾ ことによって、独自の「内的経験」を獲得したのだった。⁽³⁰⁾

2. 自然的判断

我々が先に見たように、マルブランシュにおいては、観念による明晰な認識と、内的感覚による曖昧な認識が峻別され、心は内的感覚によって認識され、物体は観知的延長として観念によって認識された。では、心身合一が存在しているとすれば、それは何によって認識されるのか。「私の心が私の身体に合一しており、また私の身体が私の存在の一部をなしていることを私が確信するのは、感覚の本能 (instinct du sentiment) によってである⁽³¹⁾」とマルブランシュは答える。すなわち心身合一は観念による認識のもつ理性的明証性に対立する感覚的本能によって認識されるのである。デカルトは知的な「自然の光」(lumière naturelle) (=理性) による認識と、身体保全のための動物的な「自然的本能」(instinct naturel) による認識を区別し、我々は前者を信用できるが、後者を常に信用すべきではないとしているが⁽³²⁾、マルブランシュにおいても同様に、感覚の本能によって把えられる心身合一は曖昧で混雑したものである。さて、マルブランシュは、この感覚の本能による心身合一の認識を「自然的判断」(jugement naturel) とも呼んでいる。「心が感覚したものを身体に割り合てるこの混雑した推論、すなわち自然的判断は、複合感覚 (sensation composée) とでも呼ばれるものにすぎない⁽³³⁾。」

この「自然的判断」の「自然的」とは如何なる意味であろうか。『真理の探求』第一版(1674)でマルブランシュは次のように規定している。「私が言っている判断とは恣意的判断 (jugements arbitraires) ではないことに注意すべきである。[...] これらは人間に自然的 [本性的] (naturels à l'homme) なのである。」⁽³⁴⁾ すなわち「自然的」とは「自然的傾向」を意味しているのであり、ここで我々が見るのはデカルトにおいて見出されたのと全く同じ「本性」による心身合一の説明である。

ここまではマルブランシュはデカルトに忠実であったと言えよう。しかし、デカルトの自然学への傾倒から出発した彼は、後年関心の比重を神学

に移すに従ってアウグスティヌス主義に傾き、デカルト自然学にアウグスティヌス神学を接木しようと試みる。それに応じて『真理の探求』も既に第二版（1675）から大幅な改変を余儀なくされる⁽³⁵⁾。第六版（1712）に至って、先に挙げた「人間に本性的」という「自然的」の定義は削除され、代わりに次の一文が挿入される。「私はこれらの判断を自然的と呼ぶが、それは、これらの判断を我々に与えるのは自然の作者 (Auteur de la nature) だからである。⁽³⁶⁾」今や自然は神の意に解され、所謂機会原因論の観点が導入される。「精神と身体の間には如何なる因果関係もないのだから、[...] 心身の合一において、神意 (décrets divins) の効力以外の結びつきは決してありえない。⁽³⁷⁾」心が感覚したものを身体に割り当てる判断を実際に行なうのは、神に他ならないのである。こうしてマルブランシュの「自然」概念は、本性から神へと変貌を遂げる。

ここで、ピランによるマルブランシュの「自然的判断」の批判を見てみよう。「自然的判断」はマルブランシュにおいて「複合感覚」である。つまり「自然的判断」は二種の異なる同時的な印象から構成されているのである。一方の印象は、心が感覚したものを身体に局在させるものとしての「判断」であり、他方は局在されるものとしての「感覚」である。複合感覚は、それが複合されたものである限り、単純な要素に分解され、二つの要素の複合の根拠、換言すれば局在させるものと局在されるものの関係としての心身関係の根拠が分析的に明らかにされなければならないとピランは主張する。しかるにマルブランシュの自然的判断において「我々は個々の要素を認める手段を全く持たない。⁽³⁸⁾」なぜならマルブランシュは「他のデカルト主義者同様、心は心身合一について生得観念をもっているとアプリオリに決めつけ、」従って「感覚は生まれつき複合されている⁽³⁹⁾」と主張するからである。しかし、ピランはこうした生得的なものの仮定を「分析への絶望の一撃⁽⁴⁰⁾」だとして非難する。

マルブランシュの「自然的判断」の理論は、局在化するものと局在化さ

れるものの複合が自然的傾向によってなされるにせよ、神意によって行なわれるにせよ、目的論的な仮定にすぎない。そしてピランの批判はその目的論的仮定に向けられているのである。形而上学的仮定が経験的分析に取って替わられるためには、コンディヤックの出現を待たねばならない。

III コンディヤックにおける全面的経験論の挫折⁽⁴¹⁾

ピランの思想形成は何よりもまずコンディヤックの影響化で成されたとは言え、ピランは一度としてコンディヤック哲学の手離しの賞讃者であったことはない。心身合一の問題についても事情は同じである。

1. 外的経験からの出発

コンディヤックは、マルブランシュの「自然的判断」すなわち「本性[自然]」による心身合一の説明に強く反対し、全てを専ら「経験」の上に基礎づけようとする。その全面的経験論貫徹の意志は、ロックよりもさらに徹底していて、彼はロックにおいてもその「反省」の観念の内に見出された精神の能動性を一切認めない。

従って、コンディヤックは最も原初的な状態としての「感覚」から出発する。しかし「我々の諸感覚は存在の様態にすぎない。しからは我々は如何にして我々の外の対象を見ることができるのか。」⁽⁴²⁾ コンディヤックはこの問いに有名は「彫像」の喩えを用いて答える。コンディヤックは純粹な感覚以外の機能は何も備えていない一つの彫像を想定し、その彫像が如何にして自己の身体をさらに自我を発見するに至るかを分析するのである。感覚に局限された彫像はまず「自分自身を何等かの拡がりを持つものとして感じ始める。」⁽⁴³⁾ これは身体器官の働きについての「基礎的感覚」である。しかしこの段階ではまだ自己の身体は発見されない。身体が発見が始まるのは、彫像が一様で混雑した状態を脱け出し、身体各部分に応じて差異をもったものになるときである。この時彫像は自分自身の延長の観念を獲得

する。「しかしこの観念は全く漠然としたものである。[...] 何故なら彫像はまだ何物にも触れていないから」⁽⁴⁴⁾である。従って身体の眞の発見は、「触覚」と共に、触れるという「運動」と共に始まる。「運動」の開始は全くの偶然に委ねられる。彫像は手で自己の身体の諸部分に触れることによって、身体諸部分の「抵抗」(résistance)を感じ取る。この「抵抗」の感覚において、彫像は自分自身に応答し、自分自身を純粋な感覚から区別する。「抵抗」の感覚は複合感覚であって、手の運動に由来する感覚と、運動に⁽⁴⁵⁾応答する感覚とから成り立っているからである。そして「彫像にとって、自分の身体、諸対象、空間が始まるのはこの[抵抗の]感覚によってである。」⁽⁴⁶⁾続いてこの抵抗の感覚の下に自我が出現する。「彫像が自らに触れ続けていくと、[...] 至る所で感覚する存在が自らに⁽⁴⁷⁾応答する。これは自我だ、やはり自我だと。」自我の存在の導出に至るまで、コンディヤックの全面的経験論は見事に貫徹されているように見える。しかし、コンディヤックの説明において、自我の出現以前に、彫像が自らを感覚し、認識し、判断する能力を備えているのはいかなることなのか。そうした能力がなければ、彫刻は自身の延長の観念を持つことも、自身に触れることもできないはずである。ビランは次のような疑問を發する。——彫像が自らの手を予め認識していないならば、彫像は如何にして手を運動させることができるだろうかと。⁽⁴⁸⁾言い換えれば「二つの受動的感覚の応答は最初の認識を基礎づけるには不十分である。何故なら、まず初めに、その二つの感覚が如何にして区別されたかが知られなければならないからである。」⁽⁴⁹⁾ビランにとって最初の認識の根拠、すなわち手の運動の根拠は精神の自発性に存し、従って抵抗感覚も、内官の努力感覚に由来する能動的感覚と、⁽⁵⁰⁾応答するものとしての受動的感覚が複合したものであるはずだった。しかるにコンディヤックの抵抗感覚は二つの受動的感覚が複合したものである。そして、それはコンディヤックの「経験」が「全く外的であり、[...] 専ら⁽⁵⁰⁾身体の二次的認識に結びついている」ことに由来している。コンディヤック

「本性」と「経験」

クの感覚が専ら外的で受動的であるのに対し、ビランにとっての感覚とは、受動的感覚と内的な能動的感覚が複合したものであったのである。ビランが鋭く指摘したコンディヤックにおける努力の内官の欠如は、コンディヤックの全面的経験論の破産を招来することになる。

2. 本性の出現と全面的経験論の挫折

我々が今まで検討してきたコンディヤックの身体理論は、『感覚論』第一版(1754)に従ったものである。コンディヤックは、再版(1778)の際に軽い修正を施しているが、第一版と再版の間に大きな内容上の変更はない。⁽⁵¹⁾しかし、『著作集』(*Oeuvres de Condillac, revues, corrigées, par l'auteur*, 1798)刊行の際、『感覚論』は大きな内容上の修正を被る。「本性」が登場するのである。

コンディヤックは自身「感覚論初版においては、問題はうまく解決されていなかったことを認める。」⁽⁵²⁾と告白する。第一版において彫像の運動が始まるきっかけは「偶然」に帰されていたが、1798年版においては、運動を「始めるのは本性である。」⁽⁵³⁾(*c'est donc à la nature à commencer.*)

さらにコンディヤックはこの「本性」の働きを「真理」(*vérité*)や「巧緻」(*artifice*)の概念によって補強する。コンディヤックに依れば子供が行なう最初の発見は身体の発見だが、その発見は子供が自分で行なうのではなく、「本性」が「既に成された」(*toute faite*)発見を子供に示すにすぎず、そのことは「真理」から帰結するといふ。⁽⁵⁴⁾また我々は自身が身体器官と結びついていることを「巧緻」によって信じるが、この「巧緻」はその基礎を「心の本性」(*nature de l'âme*)との関係で調整される身体のメカニズムにもつといふ。⁽⁵⁵⁾ここで「真理」や「巧緻」は「本性」同様目的論的仮定であることは明らかであろう。ここにおいてコンディヤックの全面的経験論の試みは挫折する。

身体認識の説明におけるコンディヤックの「経験」から「本性」への転

向はビランによっても見逃されてない。ビランは『『感覚論』の最新版には全く新しいことがいくつも見出される。』と述べて、「本性」と「巧緻」の概念を「分析の筋道を放棄した」⁽⁵⁶⁾として非難している。

コンディヤックの標榜した全面的経験論の試みは、ビランによる「経験」の意味の根本的改革——外的経験から内的経験へ——を経てのみ完遂されるであろう。そして、その改革をビランは、ロック、カバニス、そしてデストゥット・ド・トラシーの思想に触れることによって成し遂げるのである。

IV ロックにおける感覚の単純観念

ロック哲学は「経験」の哲学であり、ロックにとって「経験的方法」とは心的事象の内省的自己観察の方法である。その意味でロックはデカルトを引き継ぐ「内官」(sens intime)の哲学者であり、⁽⁵⁷⁾ロックの謂う「経験」とは「内的経験」に他ならない。とりわけ確実な認識は観念間の一致・不一致の直観的知覚だとする⁽⁵⁸⁾ロックの考え方はビラン的「内官」を先取りするものと言えるが、我々ここではロックにおける「内的経験」にはこれ以上立ち入らないことにしよう。

心身合一を論ずるときにビランが問題にするロックの概念は「経験」ではなく、「感覚の単純観念」なのである。心身合一の「判断」は「複合感覚」だとするマルブランシュ、コンディヤックを議論の出発点とするビランにとって、ロックの「感覚の単純観念」は、——ロックがそこで心身関係を問題にしているのではないにも拘らず——ぜひとも取り組まねばならない概念だったのである。

さて、ロックの「感覚の単純観念」について、ビランは肯定的・否定的二様の態度を取る。そして、それはロックの「単純観念」の「単純」という言葉がもつ二つの意味に由来する。では、ロックの「単純観念」の単純性は何に存するのか。第一にそれは量的・要素的な単純性に存する。すな

わち、「単純観念は、それぞれ自身には複合されない⁽⁵⁹⁾」、つまり複合されていないという意味で単純である。第二に、それは質的・現象的単純性に存する。すなわち、単純観念は「心での一つの均質な想念 [現象態]」(une conception entièrement uniforme; *one uniform Appearance, or Conception*) であって「人間が単純観念について持つ明晰判明な知覚ほど、その人にとって明証的なものはない⁽⁶⁰⁾」という点で単純なのである。

1. 単純感覚か複合感覚か

一方でビランは、感覚の観念の量的な意味での単純性に否定的態度をとる。この点でビランは、ロックの「感覚の単純観念」に反対し、マルブランシュやコンディヤックの「複合感覚」に好意的である。

ビランに依れば、「ロックは感覚の原初的観念についてデカルト派の人々 [マルブランシュ] によって示された分析を全く考慮せず」、感覚の観念を複合されたものでなく、「真の要素と見なした⁽⁶¹⁾」従ってロックにおいて、心が受け取った感覚を、身体各部分や対象に帰す役割を果たすのは感覚それ自体ということになり、ロックにとって最初の認識は単純な所与性として提供されるとビランは考える。

これに対して、コンディヤックは「感覚は判断と [...] 結合する限りでのみ観念となることを非常によく理解していた⁽⁶²⁾。」とビランは言う。つまりロックの「感覚の単純観念」は受動的な所与にすぎないが、マルブランシュやコンディヤックの「複合感覚」は、受動的な「感覚」と能動的な「判断」の複合物だとビランは解釈しているのである。ビランにとって「感覚の観念」とは本質的に複合的なものであった。「感覚の観念」は、主観の能動性の参与を得て初めて成立するものだからである。この点でビランはロックの単純観念に反対する。

2. 感覚の観念の単純性と「直接的覚知」

他方で、ビランはロックの「感覚の観念」の質的・現象的な単純性に好意的である。先に見たようにロックに依れば、心的現象態としての単純観念は、完全な明証性と直接性を備えている。そこからしてビランは直ちに感覚の観念の単純性を自我の「直接的覚知」に結びつける。ビランはライプニッツの「感覚」とロックの「感覚の観念」を区別し、「前者 [ライプニッツ] は感覚を、言わば感覚する存在の外で把えているが、後者 [ロック] は、意識あるいは個別的主観の直接的覚知との関係で把えている。」⁽⁶³⁾と述べている。

こうして、ビランは、ロックの「感覚の単純観念」における能動性の欠如を批判し、現象態としての明証性に注目することによって「ある特別な感官の働きのある様態」に由来する「純粹に反省的な単純観念」⁽⁶⁴⁾ (idées simples purement réflexives) を提案するのである。

コンディヤックの外的感覚から出発したビランはロックとの接触を通じて、感覚に反省的性格を付与するに至ったのだ⁽⁶⁵⁾。ロックとの接触によって感覚を内面化する道が拓かれたとは言え、ロックにおいて心身合一は問題として浮かび上がって来ない。内的感覚が心身問題の地平において論じられるようになるのは、二人の^{イデオロギー}観念学者、カバニスとデストゥット・ド・トラシーにおいてである。

V カバニスにおける内的感覚

「観念学」(idéologie) とは広い意味での意識の事実としての観念を分析することをその目的とする学である。「観念学」の特徴は、そうした分析を専ら経験と観察のみに基づいて行なおうとするところに存する。

実際、ビランにとってそうであったようにカバニスにとっても「身体的機能と心理的機能の関係を規定し、説明することを可能にするのは経験⁽⁶⁶⁾である。」しかし両者にとって「経験」の質は根本的に異なるものであるこ

「本性」と「経験」

とに注意しなければならない。ビランにとって「経験」が心理学的次元の「内的経験」であるのに対し、カバニスにとっての「経験」とは、生理学的次元の「事実の観察」であり、医学こそが、こうした「経験的方法」の規範となるものであった。

では、そうした生理学的経験によって、心身合一という事態はどのように説明されるのだろうか。カバニスに依れば、身体的機能と精神的機能は脳において関係しているという。「印象は神経を経て脳にたどり着き」、「脳は印象を言わば消化して」「観念として送り返す。」従って「脳は思惟を有機的に分泌するのである。」⁽⁶⁷⁾ ビランはこうした説明に、もちろん強い拒絶反応を示す。「脳が思惟を濾過するなど言うのは想像しうる最大の愚である。」⁽⁶⁸⁾

カバニス自身こうした生理学的説明だけでは満足が行かなかったらしく、「自然」^{ナチュラル}による説明を加えている。カバニスに依れば、この世界には「自然の統一」があり、精神的なものも物質的なものも全て同じ「自然」の様々な在り方にすぎない。「凡ゆる生命的現象は例外なくただ一つの原因に還元される。全ての運動は […] ただ一つの作用原理から派生する。こうして至る所に自然の単一性がある。」⁽⁶⁹⁾ 我々がここに見るのはまたしても目的論的な仮定である。この目的論的一元論の内に心身問題は解消してしまう。

しかし、「内的感覚」(sensation interne) の発見というカバニスの功績を忘れてはならない。カバニスは、人間の内に、もう一人の「内的人間」(homme intérieur) を仮定し、「内的人間」は「内的感覚」や「内的印象」を備えているとした。⁽⁷⁰⁾ 「内的人間」が脳である限り、カバニスの「内的感覚」は純粹に生理学的次元のものだとは言え、「にも拘らず豊かな観念であり、新たなパースペクティヴを切り拓いた。」⁽⁷¹⁾ と言える。「内的感覚」は続いてデストゥット・ド・トラシーによって、引き継がれ、彼によって生理学的次元から心理学的次元に移されるからである。

VI デストゥット・ド・トラシーにおける運動感覚

1. 運動感覚

トラシーは特にその『学士院論文』(*Mémoires à l'Institut*)によって、ピランの「心身合一の内的経験」の形成に大きな影響を与えた。ピラン自身トラシー宛書簡の中で「前述の[トラシー]の論文を初めて読んだとき、私の心の中で革命が起きました。」と述べている。⁽⁷²⁾

トラシーは、コンディヤックの「抵抗感覚」の批判から論を始める。トラシーは、我々がそれによって心に感じたものを身体に帰す判断は必然的に「複合感覚」であり、複合感覚は能動的要素としての判断と、受動的要素としての感覚を含んでいなければならないとする。コンディヤックの「抵抗感覚」は複合感覚ではあるけれども、それは二つの受動的感覚のみから成っていて、能動的要素を欠いているから、「抵抗感覚」は実は複合感覚ではなく、単純感覚だと言わねばならない。これに対してトラシーは、能動的要素としての「運動感覚」(*sensation de mouvement*)と受動的要素としての「堅さの感覚」(*sensation de solidité*)から成る真の抵抗感覚を提案する。そしてこの真の抵抗感覚は「最初の判断」であり、身体認識の初まりは触覚ではなく「運動性」(*motilité*)に帰せられる。⁽⁷³⁾

さらに注目すべきことは、「運動感覚」に意識が伴っていることである。「運動を行ない、運動について意識する能力は、我々が「身体」と呼ぶものが存在していることを我々に教える。」⁽⁷⁴⁾つまりトラシーの「抵抗感覚」とは、自己意識を伴った能動的感覚に他ならず、カバニスによって生理学的レベルで提出された「内的感覚」は、ここに至って完全に内面化される。H. グイエの言葉を引けば「トラシーによって、身体認識の心理学は本性[自然]の哲学から解放されるのである。」⁽⁷⁵⁾ここで我々は「感覚」という言葉をピランに従って定義し直す必要がある。ピランは「私は感覚することを感覚する」(*Je sens que je sens.*)という命題において、前者

の感覚は、「それによって、私が私の自我を変様の外にあるものとして認知する作用」であり、「意識という語の同義語」⁽⁷⁶⁾であることを指摘する。今や「抵抗感覚」は「内的経験」と呼ばれるにふさわしい。

尚、「抵抗感覚」は先に見たように「最初の判断」でもあるが、この「最初の判断」の内容については、トラシーとビランの間に食い違いがある。ビランにとって最初のもは、「人格の存在の判断」だが、トラシーにとっては「対象の判断」⁽⁷⁷⁾なのである。そしてトラシーの第一の判断に残された、この対象的性格は、次に見るトラシーの意見の変化の遠因を成しているのである。

2. 意志と本能

トラシーの身体理論は、『観念学綱要』(*Éléments d'idéologie*)において⁽⁷⁸⁾変化を被る。運動は「抵抗感覚」において感覚されるだけでなく、さらに「意志される」ものと規定される。そしてトラシーは「意志的運動を本能的運動 (*mouvement instinctif*) と同一視する。」トラシーは「本能的規定」(*détermination instinctive*) を定義して「それは、判断と欲求を含んだ感覚である」⁽⁸⁰⁾と述べているが、その意味するところは、抵抗感覚は本能的判断だということに他ならない。ビランの「あなたは、認識を本能に結びつける根拠を [...] お持ちなのですか？」⁽⁸¹⁾というトラシー批判を俟つまでもなく、我々はここにマルブランシュ的な「自然的判断」の再来を見るのである。

* * *

ビラン思想は存在についての思索であり、また「経験」の哲学である。一方で十八世紀唯物論の余韻を残し、また一方で十九世紀実証主義の足音を聞く過渡期に生きたビランにとって「経験」こそは、そこに己れの思索の地歩を据えるべき地盤であった。しかし、「経験」は様々なニュアンスをもって語られる。コンディヤック、カバニス、トラシーいずれもが「経

験」による心身合一の説明を志しながら、「本性 [自然]」を呼び戻すことで終わっている。ひとりビランのみが「経験」の特権を信じえたのは、ビランの「経験」の帯びていた特異なニュアンス——すなわち内面性の領域の確保——の故であった。

註

ビランの著作からの引用は『直接的覚知』『日記』を除き、ティスラン編「メヌ・ド・ビラン著作集」による。

Oeuvres de Maine de Biran, éd. P. Tisserand, 14 tomes, Paris, P. U. F., 1920-1949. (*Oeuvres* と略記.) [覆刻版: MAINE DE BIRAN, *Oeuvres complètes*, Genève, Slatkine, 1982.]

MAINE DE BIRAN, *De l'aperception immédiate*, édition critique par J. Echeverria, Paris, Vrin, 1963.

MAINE DE BIRAN, *Journal*, éd. H. Gouhier, 3 vols., Neuchâtel, La Baconnière, 1954-57.

尚 F. Azouvi 監修の下, CNRS と Vrin の共同で, 現在ビランの校訂版新著作集が刊行中である (全16巻, 第6巻のみ既刊)。現行のティスラン編著作集には, テクストの誤りが極めて多いと伝えられる。

ビランの著作中以下のものに略号を用いた。

EP: *Essai sur les fondements de la psychologie*.

AI: *De l'aperception immédiate*.

(1) この問題は以下の二ヶ所で主題的に論じられている。

EP, *Oeuvres*, t. VIII, pp. 205-216.

AI, éd. J. Echeverria, pp. 153-165.

ビランがヨーロッパ各地のアカデミーに懸賞論文として次々に提出し, その何れもが入選を果たした四論文『習慣論』(*Influence de l'habitude sur la faculté de penser*, 1802, フランス学士院), 『思惟の分析論』(*Mémoire sur la décomposition de la pensée*, 1805, フランス学士院), 『直接的覚知』(*De l'aperception immédiate*, 1807, ベルリン・アカデミー), 『人間における身体と精神の関係』(*Sur les rapports du physique et du moral de l'homme*, 1811, コペンハーゲン・アカデミー) は全て同一の内容を深化させたものであり, 『心理学基礎論』(*Essai sur les fondements de la psychologie*, 1812-15) は以上四論文の総合として企てられたものである。従って当該箇所につ

「本性」と「経験」

いても『心理学基礎論』と『直接的覚知』は殆んど同一内容の論を含んでいるが、前者の方が叙述がより精練・体系化している。

- (2) ビランは「*aperception*」をカント的意味ではなく、ライプニッツの与えた意味——すなわち「内的状態についての意識乃至反省的認識」——で用いている。Cf. LEIPNIZ, *Principes de la nature et de la Grâce fondés en raison*, § 4.
- (3) ビランは別の箇所で (*AI*, éd. J. Echeverria, p. 163, *EP, Oeuvres*, t. VIII, p. 215.) で身体の分節化された諸部分についての外的認識を身体の共存についての内的覚知に対置しているので、諸部分に分節化された身体は物質的延長としての身体であり、分節化以前の身体は内的延長としての身体であるという誤解を招きやすいが、分節化された身体も、分節化以前の身体も共に内的延長としての身体の二つの段階と考えるべきである。諸部分に分割された身体は客観的直観によって対象化されるとき物質的延長になるのである。

この点について、R. ヴァンクールは、ビランにおいて内的空間と外的空間を区別し、分節化された身体は自我・努力の出現に伴なう身体、分節化以前の身体は自我、努力の出現以前の身体だとしている。

また M. アンリはビランにおける身体を 1) 根源的存在としての主観的身体、2) 主観的身体の対項としての有機的身体、3) 客観的身体の三つに分け、分節化された身体、分節化以前の身体を共に「有機的身体」に帰属させている。

さらに B. バエルトスキは、M. アンリの身体の三区分を批判し、ビランにおいて、身体は内的覚知の対象としての身体と超越的覚知の対象としての身体の二つだけだとした上で、分節化された身体も分節化以前の身体も原初事実の一部であり、従って共に内的覚知の対象としての身体に属するとしている。

Cf. *AI*, éd. Echeverria, pp. 155-156.

EP, Oeuvres, t. VIII, pp. 208-209.

R. VANCOURT, *La théorie de la connaissance chez Maine de Biran*, 2^eéd., Paris, Aubier, 1944, pp. 183-187.

M. HENRY, *Philosophie et phénoménologie du corps, essai sur l'ontologie biranienne*, Paris, P. U. F., 1965, pp. 179-182.

B. BAERTSCHI, *L'ontologie de Maine de Biran*, Fribourg, Editions Universitaires Fribourg Suisse, 1982, pp. 78-89.

- (4) ティスラン編著作集では「*consistance du corps propre*」となっているが、

F. アズヴィに依ればフランス学士院所蔵の手稿では「*coexistence du corps*」である。尚、ナヴィル編著作集では正しく「*coexistence du corps propre*」となっている。『心理学基礎論』は未完に終わり、フランソワ・ナヴィル、エルネスト・ナヴィルの父子により遺稿から編集・出版された。ティスランはナヴィル版テキストに、1812年以降のものと思われるビランの注を付け加えた。

Cf. *EP, Oeuvres*, t. VIII, p. 215.

F. AZOUVI, "Genèse du corps propre chez Malebranche, Condillac, Lelarge de Lignac et Maine de Biran", *Archives de Philosophie*, XXXV, janvier-mars 1982, p. 96, n. 90.

Oeuvres inédites de Maine de Biran, publiées par E. Naville, Paris, Dezobry, 1859, t. I, p. 245.

(5) *Notes sur l'idéologie de M. De Tracy, Oeuvres*, t. XI, p. 227.

C. ブリュエールは、この点について「主観は身体と共に、また身体の内のみある。」(強調ブリュエール)と適確に述べている。C. BRUAIRE, *Philosophie du corps*, Paris, Seuil, 1968, p. 146.

(6) M. アンリは独自の現象学的立場から、ビランの内的経験を「超越論的主観性の絶対的内在領域」と解釈している。M. HENRY, *op. cit.*, p. 80.

(7) *Journal*, oct. 1823, éd. H. Gouhier, t. II, p. 402.

(8) *EP, Oeuvres*, t. VIII, p. 212.

(9) *Abrégé des six Méditations*, A. T., t. VII, p. 15.

尚、デカルトの著作からの引用については、各種邦訳を適宜参照させて頂いた。

(10) *A Elisabeth*, 21 mai 1643, *Oeuvres philosophiques* éditées par F. Alquié [以下 *O. P.* と略記], t. III, p. 19, A. T., t. III, p. 665.

(11) *A Elisabeth*, 28 juin 1643, *O. P.*, t. III, p. 44, A. T., t. III, pp. 691-692.

(12) *Ibid.*, *O. P.*, p. 45, A. T., t. III, p. 692.

(13) *Principes de la philosophie*, II, 2, A. T., t. IX, p. 64, t. VIII, p. 41.

ラテン語テキストは「精神は意識している」となっている。

この異同は、後に述べるようにデカルトにおいて心身合一は本性的に認識されるのか、経験によって認識されるのかを論じるのに重要なポイントなので以下に仏訳及びラテン語テキストを引用しておく。

«et que notre âme, par une connaissance qui lui est naturelle, juge que ces sentiments ne procèdent point d'elle seule, en tant qu'elle

「本性」と「経験」

est une chose qui pense, mais en tant qu'elle est unie à une chose étendue qui se meut par la disposition de ses organes, qu'on nomme proprement le corps d'un homme.»

«quos mens est conscia non a se sola proficisci, nec ad se pertinere posse ex eo solo quod sit res cogitans, sed tantum ex eo quod alteri cuidam rei extensae ac mobili adjuncta sit, quae res humanum corpus appellatur.» (強調引用者.)

尚『哲学の原理』はラテン語により書かれ、デカルトの友人ピコにより仏訳された。仏訳はデカルトが自ら校閲している。

- (14) M. GUEROUULT, *Descartes selon l'ordre des raisons*, Paris, Aubier, 1953, p. 60.
- (15) *Méditation VI*, A. T., t. VII, pp. 80-81.
- (16) *A [l'hyperaspistes]*, août 1641, A. T., t. III, p. 424.

クレルスリエによる仏語訳ではラテン語テキストにない「毎日」(tous les jours)という言葉が追加されている。cf. *O. P.*, t. II, p. 361.

- (17) *A Arnauld*, 29 juillet 1648, A. T., t. V, p. 222.
- (18) MAINE DE BIRAN, *Nouveaux essais d'anthropologie, Oeuvres*, t. XIV, p. 270.
- (19) *Principes de la philosophie*, A. T., t. VIII, p. 23.
- (20) *Ibid.*, II, 2, A. T., t. VIII, p. 41.

前註 (13) 参照。

- (21) この点について諸家の意見の概要を記せば、

J. ラポルトは、デカルトの「経験」に「本能」(instinct) とビラン的「直覚」(intuitus) の二様の意味を認める。

F. アルキエは、デカルトの「経験」は、ビランに代表される直覚の哲学 (philosophie de l'intuition) における「経験」のような確実性を提供しないとする。デカルトにおいては知得 (percevoir) している私は、知得していること自体については確実であっても知得の対象については確実でないからである。

H. グイエは、デカルトの「経験」を意識の直接与件の意に解し、そのビラン的経験との類似性を強調する。

M. メルロ=ポンティは、デカルトにおける心身合一の「経験」を実生活の日常的経験の意味に解釈している。

Cf. J. LAPORTE, *Le rationalisme de Descartes*, 2^eéd., Paris, P. U. F.,

- 1950, pp. 228-235.
- F. ALQUIÉ, *La découverte métaphysique de l'homme chez Descartes*, Paris, P. U. F., 1950, pp. 305-306.
- H. GOUHIER, *La pensée métaphysique de Descartes*, 3^e éd., Paris, Vrin, 1978, pp. 334-344.
- M. MERLEAU-PONTY, *Phénoménologie de la perception*, Paris, Gallimard, 1945, pp. 231-232.
- (22) *Recherche de la vérité*, VI-2, ch. VI, éd. G. Rodis-Lewis, Bibl. de la Pléiade, p. 695 et 696.
- (23) *Méditations chrétiennes*, VI, § 7, éd. A. Robinet, *Oeuvres complètes* [以下 O. C. と略記], t. IV, p. 61.
- (24) MAINE DE BIRAN, *Notes sur Malebranche, Oeuvres*, t. XI, p. 161.
- (25) Cf. V. DELBOS, "Malebranche et Maine de Biran", *Revue de Métaphysique et de Morale*, janvier 1916, p. 157.
- (26) MAINE DE BIRAN, *Notes sur Malebranche, Oeuvres*, t. XI, p. 158.
- (27) Cf. A. ROBINET, *Système et existence dans l'oeuvre de Malebranche*, Paris, Vrin, 1965, pp. 346-350.
- (28) *XV^e Eclaircissement*, VI^e preuve, éd. G. Rodis-Lewis, Bibl. de la Pléiade, p. 991.
- (29) G. RODIS-LEWIS, *Nicolas Malebranche*, Paris, P. U. F., 1963, p. 338.
- (30) M. アンリは、マルブランシュの「内的感覚」を「現象学的認識の根源的本質である顕現 (manifestation) による、確定され構成された存在の領域の顕現」と解釈しているが、この解釈は哲学史的には不正確と言わざるを得ない。Cf. M. HENRY, *L'essence de la manifestation*, Paris, P. U. F., 1963, p. 528.
- (31) *Recherche de la vérité*, V, ch. X, éd. G. Rodis-Lewis, Bibl. de la Pléiade, p. 528.
- (32) DESCARTES, *A Mersenne*, 16 oct. 1639, *O. P.*, p. 146, A. T., t. II, p. 599.
- (33) *Recherche de la vérité*, I, ch. X, § 5, note, Bibl. de la Pléiade, p. 94.
- (34) *Ibid.*, I, ch. VII, § 4, var. e, p. 1376.
- (35) この点については、
Cf. G. RODIS-LEWIS, *op. cit.*, pp. 46-51.
A. ROBINET, *op. cit.*, pp. 305-315.
M. GUEROUULT, *Malebranche*, Paris, Aubier, 1959, t. III, pp. 66-78.
- (36) *Recherche de la Vérité*, I, ch. VII, § 4, Bibl. de la Pléiade, p. 68.

「本性」と「経験」

- (37) *Entretiens sur la métaphysique et sur la religion*, IV, § 11, éd. A. Robinet, O. C., t. XII, p. 96.
- (38) *EP, Oeuvres*, t. VIII, p. 212.
- (39) *AI*, éd. Echeverria, p. 159.
- (40) *Ibid.*, p. 159.
- (41) 本節の叙述は下記論文に負うところが大きい。F. AZOUVI, art. cit., pp. 91-94.
- (42) *Extrait raisonné du Traité des sensations*, éd. du Corpus général des philosophes français par G. Le Roy, t. I, p. 329.
- (43) *Traité des sensations*, *ibid.*, p. 252, note b.
- (44) *Ibid.*, p. 253, note a.
- (45) *Ibid.*, p. 255, note a.
- (46) *Ibid.*, p. 256, note b.
- (47) Cf. G. MADINIER, *Conscience et mouvement, étude sur la philosophie française de Condillac à Bergson*, 2^e éd., Louvain, Editions Nauwelaerts, 1967, p. 17.
- (48) Cf. MAINE DE BIRAN, *Mémoire sur la décomposition de la pensée*, *Oeuvres*, t. IV, p. 6.
- 尚、この点についてM. アンリは、「手の運動は世界の中で把えられることなく認識される。手の運動は、超越論的内的経験において直接的に与えられる。超越論的内的経験は手の運動そのものと混ざり合っているのである。」(強調アンリ)と述べている。M. HENRY, *Philosophie et phénoménologie du corps*, pp. 81-82.
- (49) *EP, Oeuvres*, t. VIII, p. 215.
- (50) *Ibid.*, p. 214.
- (51) Cf. G. LE ROY, *La psychologie de Condillac*, Paris, Boivin, 1937, pp. 144-145.
- (52) *Extrait raisonné du Traité des sensations*, éd. Le Roy, pp. 329-330.
- (53) *Traité des sensations*, éd. Le Roy, p. 255.
- (54) *Ibid.*, p. 254.
- (55) *Ibid.*, p. 254.
- (56) *AI*, éd. Echeverria, p. 160, note 689.
- (57) Cf. G. RODIS-LEWIS, *Descartes, textes et débats*, Paris, Librairie Générale Française, 1984, p. 636.

- (58) *Essai sur l'entendement humain* tr. par P. Coste, 5^e éd. 1755, [覆刻版: éd. E. Naert, Paris, Vrin, 1972.] IV, ch. II, § 1, pp. 432-433.
『人間知性論』からの引用は、コストによる仏訳版のページ数を記す。コスト訳はロック自身により校閲されており、原テキストに次ぐ価値を認められている。ライプニッツは『人間知性新論』の執筆にコスト訳を参照した。ビランもコスト訳を使用している。尚、大槻春彦氏による邦訳（岩波文庫）を適宜参照させて頂いた。
- (59) *Ibid.*, II, ch. II, § 1, p. 75.
- (60) *Ibid.*, II, ch. II, § 1, p. 75. [英語版: ed. by P. H. Nidditch, Oxford, Oxford Univ. Press, 1975, p. 119.]
- (61) *EP, Oeuvres*, t. VIII, p. 213.
- (62) *Ibid.*, p. 213.
- (63) *AI*, éd. Echeverria, p. 61, note (a).
- (64) *Ibid.*, p. 66.
- (65) Cf. L. EVEN, *Maine de Biran, critique de Locke*, Louvain, Ed. de l'institut supérieur de philosophie, 1983, p. 57.
- (66) F. COLONNA D'ISTRIA, "L'influence du moral sur le physique d'après Cabanis et Maine de Biran", *Revue de métaphysique et de moral*, XXI, 1913, p. 461. (強調引用者).
- (67) *Rapports du physique et du moral de l'homme*, éd. L. Peisse, 1844, [覆刻版: Genève, Slatkine, 1980.] p. 138.
- (68) *Notes sur l'influence des signes, Oeuvres*, t. I, pp. 277-278.
- (69) *Rapports du physique et du moral de l'homme*, éd. L. Peisse, p. 597.
- (70) *Ibid.*, p. 154.
- (71) D. VOUTSINAS, *La psychologie de Maine de Biran*, Paris, S. I. P. E., 1975, p. 260.
- (72) MAINE DE BIRAN, *A Tracy, Oeuvres*, t. VII, p. 230.
- (73) *Mémoires de l'Institut*, t. III, pp. 449-500, cités par G. Madinier, *op. cit.*, p. 49.
- (74) *Ibid.*, t. I, p. 302, *ibid.*, p. 50.
- (75) H. GOUHIER, *Les conversions de Maine de Biran*, Paris, Vrin, 1948, pp. 142-143.
- (76) MAINE DE BIRAN, *Influence de l'habitude sur la faculté de penser, Oeuvres*, t. II, pp. 18-19, note. (強調ビラン)

「本性」と「経験」

- (77) Id., *A Tracy, Oeuvres*, t. VII, pp. 233-234.
- (78) Cf. E. SCHWARTZ, “Idéologie et logique du jugement à travers la correspondance de Tracy avec Maine de Biran”, *Les études philosophiques*, janvier-mars 1982, pp. 20-21.
- (79) MAINE DE BIRAN, *A Tracy, Oeuvres*, t. VII, p. 236.
- (80) *Eléments d'idéologie*, 3^e éd., Paris, 1817 [覆刻版: éd. H. Gouhier, Paris, Vrin, 1970.] t. I, p. 151.
- (81) MAINE DE BIRAN, *A Tracy, Oeuvres*, t. VII, p. 239.